

金玉要集と孝子伝

— 孝子伝の享受 —

黒田 彰

一、金玉要集における孝子伝の受容について

二、享受の諸相(1)―曹娥、叔先雄のことなど

三、享受の諸相(2)―丁蘭、孟宗のことなど

四、孝子伝和歌、孝行集をめぐる

金玉要集は、中世の唱導書であるが、説話文学、仏教文学などから見て、非常に価値ある書物である。従来大変見にくいものであったが、先般漸く翻刻本文が公刊された(『磯馴帖』村雨篇(和泉書院、平成14年)、『説話唱導資料』所収)。その金玉要集に極めて興味深い孝子伝説話が幾つも採られ、和歌を伴うことや、説話集宝物集などと相互なもののあること、静嘉堂文庫蔵孝行集と密接な関係があることなどは、かねて気に掛かっていた。

今般『孝子伝注解』(汲古書院、初版、平成15年)の重版に際し、その文献資料欄における金玉要集の項を見直すに当たり、今一度金玉要集と孝子伝の関係を確認する機会に恵まれた。そこで、改めて金玉要集の孝子伝享受の具体相を報告しておくべく、ここに一文を草する。また、その孝子伝享受の一覧に加え、和歌の問題、孝行集との関連などにも触れ、今後の研究に対する足場の提供を試みた。

幼学の会による『孝子伝注解』の重版に当たり、^①初版の不備を訂正する機会があつて、一通り内容を点検していた所、内閣文庫蔵金玉要集についての言及の有無が、一定していないことに気付き、この夏、その補訂に従事した。問題の唱導書、金玉要集に、二十箇所近い孝子伝関連記事のあることは、かねて気に掛かつていたが、『孝子伝注解』と前後して金玉要集の翻刻本文も公刊され、披閱の便宜の協つたことに鑑み、この際、金玉要集と孝子伝との関係を報告しておくことも、強ちに意味のないことではないように思われる。そこで、以下、金玉要集の孝子伝享受の一般的、基礎的事実を概説しつつ、気の付いた範圍の事柄を覚書風に述べてみたい。

まず管見に入つた、金玉要集における孝子伝関連記事、十八条の所在を一覧として示せば、左の如くである(1)―(16)の通し番号を付し、陽明、船橋本孝子伝における孝子名と条数へ同じ孝子に関する、金玉要集の複数の記事はa、bで示す、その下の「」に金玉要集本文の書出し部分を掲げる。(一)内は、金玉要集全十巻の巻数と章段名で、末尾に公刊本文へ『機馴帖』村雨篇の頁数とその上下を添えた。

- (1) 原谷 6 ― 「持祖父與……」(第一「一、祖父母之事」、140頁下段)
- (2) a 舜 1 ― 「唐土舜申……」(第一「弟妹之事」、146頁下段)
b ― 「振旦堯舜……」(第二「一、慈父孝養之事」、152頁上段)
- (3) 魏陽 7 ― 「魏揚殺敵……」(第二「一、慈父孝養之事」、152頁下段)
- (4) 郭巨 5 ― 「郭巨埋子……」(第二「一、慈父孝養之事」、152頁下段)
- (5) 曹娥 17 ― 「曹娥女恋……」(第二「一、慈父孝養之事」、153頁上段)
- (6) 叔先雄 29 ― 「昔椒雄云……」(第二「一、慈父孝養之事」、153頁上段)
- (7) 伯奇 35 ― 「大唐吉甫……」(第二「一、慈父孝養之事」、154頁下段、155頁上段)
- (8) 三州義士 8 ― 「大唐兵乱……」(第二「一、養父」、155頁上段)
- (9) 丁蘭 9 ― 「丁蘭刻木……」(第三「一、悲母之事」、156頁下段)
- (10) 孟仁 26 ― 「所謂孟宗……」(第三「一、悲母之事」、157頁上段、同下段)

(11) 韓伯瑜 4 — 「伯瑜孝現……」 (第三「一、悲母之事」、158頁上段)

(12) 蔡順 11 — 「蔡順訪後……」 (第三「一、悲母之事」、158頁上段)

(13) 陳寔 15 — 「山送如存……」 (第三「一、悲母之事」、159頁上段)

(14) 顏烏 30 — 「墓所如存……」 (第三「一、悲母之事」、159頁上段)

(15) a 張敷 25 — 「漢土長敷……」 (第三「同悲母事」、162頁下段)

b — 「悵敷泣形……」 (第三「同悲母事」、163頁上段)

(16) 東婦節女 43 — 「市東婦節……」 (第四「一、夫妻事」、168頁上段)

なお(3)と(4)、(5)と(6)、(11)と(12)、(13)と(14)は、対句として、一連の文となっている。以下、(1)―(16)の順を追って、金玉要集の該当本文を掲げ、孝子伝との対応を確認してゆく。

(1) 原谷
金玉要集の本文を示せば、次の通りである (内閣文庫本に拠る)。

・持祖父興孝養志深、彼原谷忽至大慰之位。(第一「一、祖父母之事」)

言泉集以下、唱導資料の引く孝子伝は、陽明本系が多い。そこで、以下、仮に陽明本を用い、孝子伝の内容を掲げた。陽明本孝子伝 6 原谷の本文を示せば、次の通りである。

楚人、孝孫原谷者至孝也。其父不孝之甚、乃(祖父年老)厭患之。使原谷作輦(扛)祖父送於山中。原谷復將輦還。父大怒曰、何故將此凶物還。答曰、阿父後老復棄之、不能更作也。頑父悔悞、更往山中、迎父率還。朝夕供養、更為孝子。此乃孝孫之礼也。於是閨門孝養、上下无怨也

内閣文庫本金玉要集の「原谷」の原字は、厚に作るが、字形の類似による誤写と見られる。

(2) 舜

金玉要集第一、第二の二箇所に見える舜の話は、a、bとして示せば、次の通りである。

・a 唐土舜申有孝子。弟象事大切思。後母讒言不疑、我失恨思。然間、此舜行他郷、成大臣。蒙朝恩、後忝成堯王婿、繼其位、難有一人。備王位、一天四海主、万乗被仰、舜王御帝被祝給 (第一「弟妹之事」)

・b 振旦堯舜、位後喜為子、僻父為子。其意歌云、

ツ、井水ノ底沈ト見ム

雲井ヲテラス光ナリケリ

（第二）一、慈父孝養之事

陽明本孝子伝一舜の本文を示せば、次の通りである。

帝舜重花、至孝也。其父瞽瞍、頑愚不別聖賢。用後婦之言、而欲殺舜。便使上屋、於下燒之。乃飛下、供養如故。又使治井、沒井、又欲殺舜。乃密知、便作傍穴。父畢以大石填之。舜乃泣東家井出。因投歷山、以躬耕種穀。天下大旱、民無收者、唯舜種者大豐。其父填井之後、面目清肅。至市就舜糴米、舜乃以錢還置米中。如是非一。父疑是重花。借人看朽井、子无所見。後又糴米、对在舜前。論賈未畢、父曰、君是何人、而見給鄙。將非我子重花耶。舜曰、是也。即來父前、相抱号泣。舜以衣拭父兩眼、即開明。所謂為孝之至。堯聞之、妻以二女、授之天子。故孝經曰、事父母孝、天地明察、感動乾靈也。

焚廬、掩井など、舜の継子譚としての内容は、金玉要集では全く語られない。さて、興味深いのは、例えばaに、

然間、此舜行他郷、成大臣。

と言うのは、舜の歴山で耕することを指すが、このような言い換えは、例えば「継子の井戸掘り」と呼ばれる、昔話

に取り入れられた舜の話の中に、

ずーと逃げてね、それからこれは田舎に行つてそこで学問をして妻を娶つて、大きな店をかまえているわけ

（那覇市真嘉比・女）

とされたり、或いは、

4、旅に出て侍になり……

などとされるプロットがあり、その「異郷への脱出と思われる」と言われる要素が、昔話「継子の井戸掘り」に出現するに際し、金玉要集の如き唱導書が、一定の役割を果たしたことを、示唆している点である（1）原合に、「彼原谷忽至大慰之位」と言うのも、原話に見えず、同様に考えられる。また、aの末尾に、「其意歌云」として引かれる、「ツ、井水ノ」歌は、舜の掩井譚を詠み込んだものと思われる、(5)(6)以下に引かれる歌共々、言わば孝子伝和歌とも称すべき、一連の歌作の一首と考えられる重要なものだが、目下金玉要集にしか、所見がない。

(3)魏陽

前述のように、(3)魏陽は(4)郭巨と対になっている。金玉要集の本文を示せば、次の通りである。

・魏揚殺敵、称父孝王、臣賜勸賞（第二）一、慈父孝養之事

陽明本孝子伝7 魏陽の本文を示せば、次の通りである。

沛郡人魏陽至孝也。少失_レ母。独与_レ父居。孝養甚々。

其父有_二利戟_一。市南少年、欲得_二之於路_一、打_二奪其父_一。

陽乃叩頭。県令召問曰、人打_二汝父_一。何故不_レ報。為力

不_レ禁耶。答曰、今吾若即報_二父怨_一、正有_二飢渴之憂_一。

県令大諾_レ之。阿父終没。即斬_二得彼人頭_一、以祭_二父墓_一。

州郡上表、称_二其孝德_一、官不_レ問_二其罪_一、加_二其禄位_一也

魏陽についての資料は、画像資料を別として、極めて限ら

れており、船橋本の他、蕭広済孝子伝（太平御覧三五二、

淵鑑類函二二四所引）、逸名孝子伝（太平御覧四八二、淵

鑑類函三一二所引）の逸文二条が知られるに過ぎない。参

考までに今、それらの本文も示しておく（蕭広済孝子伝、

逸名孝子伝の本文は、太平御覧に拠り、（一）内に淵鑑類函

との異同を示した）。

・船橋本

魏陽者、沛郡人也。少而母亡、与_レ父居也。養_二父蒸々_一。

其父有_二利戟_一。時_レ壯士、相_二市南路_一、打_二奪_レ戟矣。其父

叩頭。於時県令聞_レ之、召_二陽問云_一、何故不_レ報_二父仇_一。

陽答云、如今報_二父敵者_一、令_二父致_二飢渴之憂_一。父没之

後、遂斬_二敵頭_一、以祭_二父墓_一。州県聞_レ之、不_レ推_二其罪_一、

称_二其孝德_一、加_二以禄位_一也。

・蕭広済孝子伝

蕭広済孝子伝曰、魏陽、不_レ知_二何処人_一、独与_レ父居。

父有_二刀戟_一、市南少年求_レ之。陽曰、老父所_レ服、不_レ敢

相許。少年怒、道逢陽父打_二（擊_レ毆_レ之_一）。陽叩頭請_二罪_一。

父没。陽断_二少年頭_一、以謝_二父家前_一。

・逸名孝子伝

孝子伝曰、魏湯、少失_二其母_一、独与_レ父居。色養蒸々、

尽_二於孝道_一。父有_二所_レ服刀戟_一、市南少年欲得_レ之。湯

曰、此老父所_レ愛、不_レ敢相許。於_レ是少年、毆_二湯父_一。

湯叩頭拜_二謝_レ之_一、不_レ止。行路書生牽_二止_レ之_一、僅而得_レ免。

後父寿終。湯乃殺_二少年_一、断_二其頭_一、以謝_二父墓_一焉。

一方、我が国の資料においても、魏陽譚は、早く天平五年七月二十九日の大神虫麻呂による時務策（経国集二十策下所収）に引かれるものの、以降、大谷本言泉集「父料施主分」に二箇所の言及を見、孝行集4に説話化される他には目下所見がなく、金玉要集の記事は貴重なものとなつてゐる。魏陽譚が古代、中世の敵討の概念形成に果たした役割には、注目すべきものがあり、なお今後の注釈、唱導資料の博搜が俟たれよう。さて、金玉要集の本文は後半、誤りがあるようだ。現行本文で敢えて読むなら、「魏陽敵を殺す、父の孝を称え、王臣勧賞を賜う」などとならうか。

(4) 郭巨

(3)に続く、(4)郭巨の金玉要集の本文を示せば、次の通りである。

・郭巨^巨埋子、孝母シカハ、天与黄金^{玉ヲ云々}「一、慈父孝養之事」

陽明本孝子伝5郭巨の本文を示せば、次の通りである。

郭巨者、河内人也。時年荒。夫妻昼夜勲作、以供養母。其婦忽然生一男子。便共議言、今養此兒、則廢母供事。仍掘地埋之。忽得金一釜。々上題云、黄金一釜、天賜郭巨。於是遂致富貴、転孝蒸蒸。賛曰、孝子郭巨、純孝至真。夫妻同心、殺子養親。天賜黄金、遂感明神。善哉孝子、富貴榮身

二

(5)曹娥

(5)曹娥は、(6)椒雄へ続く。第二、巻頭の目次に、「一、曹娥女恋父歌有之」と言う(本文中にはない)。金玉要集の曹娥の本文を示せば、次の通りである。

・曹娥女、恋父行其河、引琴詠歌、コソ哀ナレ。

モロトモノソコノミクツト沈シニ

深キ思ノエニソアリケル

(第二「一、慈父孝養之事」)

対応する陽明本孝子伝17曹娥の本文を示せば、次の通りで

ある。

孝女曹娥会稽人也。其父盱能絃歌。為巫婆神溺死。不得父尸骸。娥年十四。乃緣江号泣。哭声昼夜不絶。旬有七日。遂解衣投水呪曰、若值父尸骸、衣当沈。衣即便沈。娥即赴水而死。県令聞之、為娥立碑、顯其孝名也

さて、静嘉堂文庫蔵孝行集37にも、「孝女曹娥孝事」と題する曹娥譚が収められ、その末尾に、

此意哥、

同シ江ニ沈ミハテキアヤメ草ヒキ別ニシ跡コヒツ、なる歌が見えることは、金玉要集と共通するが、但し、この歌は金玉要集と一致せず、却って、金玉要集次条の叔先雄の引歌と一致することが興味深い。しかし、歌中の「アヤメ草」の語から考えると、この歌は曹娥に関するものらしい(後漢書八十四等に、曹娥の父の溺死日を五月五日とする)。そして、金玉要集の「モロトモニ」歌は、目下他に所見がない。

(6)叔先雄

(6)叔先雄は、(5)の曹娥から続くものである。第二、巻頭の目次に、「一、椒雄歌有之」と記す(本文中にはない)。

金玉要集の叔先雄の本文を示せば、次の通りである。

・昔椒雄^{シヨウキョウ} 云^{イハ}シ人女^メ、恋父^チ、大河身^ニ投時、

オナシエニ身ヲソシツムルアヤメ草

ヒキワカレニシアトヲタツネテ

(第二)「一、慈父孝養之事」

陽明本孝子伝29叔先雄の本文を示せば、次の通りである。

孝女叔先雄者至孝也。父墮^ツ水死。失^ク戸骸。感^カ憶其

父、常自号泣、昼夜不^レ已。乃乘^ル船、於^ニ海父墮^ル処、

投^ル水而死。見^ル夢、与^レ弟曰、却後六日、当^ニ共^ニ父出^ル。

至^レ期、果与^レ父相見、持^ニ於水上。郡県令^ミ為^レ之立^ニ碑

文也

金玉要集の「椒雄」は、叔先雄の訛伝であらうが、この呼

称はまた、隆堯の十五本跡讀嘆修善鈔下の記す類句中に、

唐^{モロコシ} 二叔雄^{シユクユウ}ト云者ハ、父ガ為^ニ同江^{キエ}ニ身ヲ投^ス……叔

雄カ身ヲ投^スシ、更ニ出離生死ノ便トナラス

等と見え、単純な誤写などではないことに、注意する必要

がある。金玉要集の「オナシエニ」歌が、孝行集37曹娥の

引歌と一致ないし、酷似すること、また、それが曹娥の歌

らしいことは、前述の如くである。曹娥譚と叔先雄譚は、

話柄の極めて類似する点が、このような歌の遣り取りを可

能とする一因をなしたものと思われる。なお叔先雄譚は目

下、我が国における文献に殆ど見当たらず、金玉要集のそ

れは、非常に珍しい例となっている。

(7)伯奇

金玉要集の伯奇の本文を示せば、次の通りである。

・大唐、吉甫^{キフ}云人、有孝父事無限^ニ子、名云伯奇^ト。彼母

厭^ム之、如^シ入^ル眼塵^ニ。或時、瓶入蛇^ニ、当腹^ノ弟少^キ持^ツ之、

讒言^ニ、又不用^ス之。後母懷入蜂^ニ、伯奇云助^ス。伯胸^ヲ入手^ニ

謀^ヲ、見^ル父。々思^ハ実^ニ、不孝^ニ子問^フ之。無物言^フ。将殺逃

去^ル。父追廻^ル。河伯神哀助^フ之、成国智臣^ト云^ハ。(第二)「一、

慈父孝養之事」

少し長文となるが、例によつて陽明本孝子伝35伯奇の本文

を示せば、次の通りである。

伯奇者周丞相尹吉甫之子也。為^レ人慈孝。而後母生^ニ一

男、仍憎^ム嫉伯奇。乃取^ニ毒蛇^ニ、納^ニ瓶中^ニ。呼^ニ伯奇^ヲ、将^レ

殺、小兒戲。少兒畏^ル蛇、便大驚叫。母語^ニ吉甫^ヲ曰、

伯奇常欲^シ殺^ス我小兒。君若不^レ信、試往^ニ其所^ニ看^ル之。

果見^ル之、伯奇在^ニ瓶蛇^ニ焉。又讒言、伯奇乃欲^シ非^ニ法

於我^ニ。父云、吾子為^レ人慈孝、豈有^ニ如^レ此事^ニ乎。母曰、

君若不^レ信、令^ニ伯奇向^ニ後園^ニ取^ニ菜^ヲ。君可^ニ密窺^ル之。

母先賣^ニ蜂置^ニ衣袖中^ニ、母至^ニ伯奇辺^ニ、白^ニ蜂螫^ル我^ニ。即

倒^レ地、令^ニ伯奇為^ニ除^ス。奇即低頭捨^ル之。母即還^ニ白^ニ吉

甫^ニ、君何見否。父因信^ス之。乃呼^ニ伯奇^ヲ曰、為^ニ汝父^ニ

上不^レ慙^ル天、娶^ニ後母^ニ如^レ此。伯奇聞^ル之、嘿然无^レ氣、

因欲^シ自殞^ス。有^レ人勸^ル之、乃奔^ニ他国^ニ。父後審定、知^ニ

母奸詐。即以素車白馬、追伯奇。至津所、向、曰：津吏曰、向見童子赤白美兒至津所不。吏曰、童子向者、而度至河中。仰天歎曰、飄風起兮吹素衣、遭世乱兮无所歸、心鬱結兮屈不申、為蜂厄即滅我身。歌訖、乃投水而死。父聞之、遂悲泣曰、吾子枉哉。即於河上祭之。有飛鳥來。父曰、若

是我子伯奇者、當入吾懷。鳥即飛上其手、入懷中、從袖出。父之曰、是伯奇者、當上吾車、隨吾還也。鳥即上車、隨還到家。母便出迎曰、向見君車、上有惡鳥。何不射殺之。父即張弓取矢、便射其後母、中腹而死。父罵曰、誰殺我子乎。鳥即飛、上後母頭、啄其目。今世鷄梟是也。一名鷄鵂、其生兒還食母。詩云、知我者、謂我心憂。不知我者、謂我何求。悠悠蒼天、此何人哉、此之謂也。其弟名西奇

伯奇譚は、注好選上六十六、今昔物語集九・二十以下に喧伝する有名なものであるが、金玉要集の伝えるそれも、極めて貴重な例となっている。金玉要集の当条は、伯奇譚における蛇の話、蜂の話、伯奇の流離の話から成っているが、取り分け、例えば伯奇の流離の話における末尾に、

河伯神哀助之

と記すのは、頗る特異なことしなければならない。即ち、

伯奇譚において河伯のことに言及する文献は、従来の資料中に見当たらず、目下の所、管見に入つたものとして、敦煌本北堂書鈔体甲（P二五〇二）一点のみとなっている。参考までにその本文を示しておけば、次の通りである（図版参照）。

伯奇抱石、空伯奇者、周時之上卿尹吉甫之子。少

心奉侍、過於親母。々生一子、字子圭。伯奇妬、欲却伯奇。謂夫曰、伯奇無慈、打伯子圭。有此

後母屢度讒言、其父遂不信。母謂夫曰挽。甫便取言、謂伯奇曰、既是汝母、因何有此不仁。汝若雪

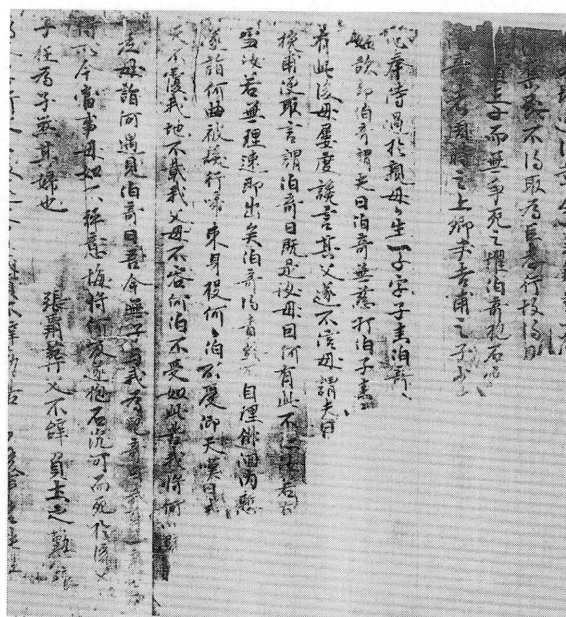
汝若無理、速即出矣。伯奇得責、終不自理。徘徊内慙。遂詣河曲、被髮行啼。束身投河、々伯不受。仰天

嘆曰、我天不覆我、地不載我、父母不容、河伯不受、如此苦我、將何一老母詣河。遇見伯奇曰、吾

今無子、与我為兒。奇曰、我事一親、不得所。今當事母、如不称意。悔將何及。遂抱石、沈河而死。於後

父知子枉、為子殺其婦也

敦煌本北堂書鈔体甲、傍線部に、河へ投身した伯奇を河伯が沈ませず、助けたことが見え、ために伯奇は、石を抱かないと水に沈むことが出来なかつたのである（伯奇が石を抱いたことは、これもまた、類林逸文へ類林雜説一、西夏本類林二・九にしか見えない記事となっている）。金玉



敦煌本北堂書鈔体甲 (P2502)

要集が果して、どのような径路を辿って、河伯の話を手に入れるに至ったか、唱導、注釈また、幼学の実態的広がりを追尋すべき、恰好の例と言えよう。また、「成国智臣」という結末も、他に例を見ない。

(8) 三州義士

金玉要集の三州義士の本文を示せば、次の通りである。

・大唐^一兵乱之時、三州独身、三人行合、自今以後、親子タラン。老成父云、如何。河中造家^二云々。其子思契、十月廿日、沈無物。夜々泣々、有何罪。左道父被養。天神可然、河中賜地。其夜河中生大厰。帝聞之、賜官^三云々(第二「一、養父」)

陽明本孝子伝8三州義士の本文を示せば、次の通りである。

三州義士者、各一州人也。征伐徒行、並失^レ郷土、会^二宿道辺樹下^一。老者言、將不^レ共結^二断金耶^一。二少者敬諾、遂為^二父子^一。慈孝之志、倍^二於真親^一也。父欲試^レ意、勅^二二子於^二河中^一立^二舍^一。二子便昼夜簞^レ土、填^二河中^一。經三年、波流飄蕩、都不^レ得^レ立。精誠有^レ感、天神乃化作^二一夜叉^一、持^二一丸土^一投^二河中^一。明忽見^二河中^一土高數十丈、瓦宇數十間。父子仍共居^レ之。子孫生長、位至三千石。家口卅余人、今三州之氏是也。後以^二三州^一為^レ姓也

三州義士譚については、天台大師智顗がその摩訶止観四下に、「更結三州還敦五郡」と言及したことから、湛然の止観輔行伝弘決四之三に該句を注して「孝伝」「蕭広濟孝子伝」を引く以下の一流があつて、我が国の唱導、注釈に大きな影響を及ぼしていることに、注意を払う必要がある。さらに、日本靈異記以下の三州義士譚享受の流れを眺める時、そこには、文学史における孝子伝享受の典型とも言うべき具体相を、捉えることが出来るのだが、金玉要集の当条や孝行集6（「アサカラヌ」歌のみ。説話はない）などは、その重要な一角を形作る資料となっている。

三

引き続き、金玉要集第三以降の孝子伝関連記事を検討してゆく。

(9) 丁蘭

金玉要集の丁蘭の話を示せば、次の通りである。歌との関係で、続きの句も掲げた。

・丁蘭刻木母切友、漢明帝恋先妣顔

ウツシラクケフリノアトノ悲キニ

カサネテモユルチキリナリケリ

（第三「一、悲母之事」）

陽明本孝子伝の丁蘭の本文を示せば、次の通りである。

河内人丁蘭者至孝也。幼失_レ母、年至_{三十五}、思慕不_レ已。乃_レ剋_レ木_ヲ爲_レ母、而供_レ養_之如_レ事_ニ生母_ノ不_レ異。蘭婦不_レ孝、以_レ火_ヲ燒_ニ木母_ノ面。蘭即夜夢語_ニ木母_ノ言、汝婦燒_ニ吾面。蘭乃_レ笞_ニ治其婦、然後遣_之。有_ニ隣人_一借_ニ斧。蘭即啓_ニ木母_ノ。々顔色不_レ悅。便不_レ借_之。隣人瞋恨而去。伺_ニ蘭不在、以_レ刀_ヲ斫_ニ木母_ノ一臂。流血滿_ニ地。蘭還見_レ之、悲号叫_レ慟、即往斬_ニ隣人頭_ヲ、以_レ祭_ニ母。官不_レ問_ニ罪、加_ニ祿位_ニ其身。贊曰、丁蘭至孝、少喪_ニ亡親_一、追慕无_レ及、立_ニ木母_ノ人、朝夕供養、過_ニ於事_ノ親、身没名在、万世惟真

丁蘭譚は、孝行集7にも、

丁蘭孝哥。

キエカヘリカナシキ物ハメマヘニシホレフシヌルハ、キ、ノ露

と見えるが（孝行集の丁蘭譚は歌のみ）、その歌は、金玉要集のそれとは一致しない。ところで、金玉要集の丁蘭譚は、「漢明帝恋先妣顔」と対をなし、後者は、出典未詳ながら、宝物集一の、

漢明帝は、母の忌日をば一年にふたゝびこそし給ひけれ。二度と云は、我をうみ給ふ日と、まさしく死給ひし日となり。人、子をうむ時は、一定死すべき事なれ

ば、其心を觀じ給ふ也(吉田本)

とある話との関連が指摘されている。すると、金玉要集の「ウツシラク」歌は、妻が木母を顔を焼いたことを詠む、丁蘭譚に付随した歌である可能性が高いことになる。孝行集の「キエカヘリ」歌共々、金玉要集のそれも、目下他に所見がない。

(10) 孟仁

金玉要集の本文を示せば、次の通りである。

・所謂孟宗雪中笋拔、其母受病。祈藥不協、待死日^ニ処、傾物端多。東門五色之瓜、西京七斑之茄子、山海珍物、尋之与之。于時十二月也。未傾笋。孟宗云、箬梅雨之比、山時鳥鳴時、卯花撫子開乱、下女殖小苗、折節コソ、紫笋分砂生候。近來如何可有候云。母云、近來不得求コソ、角欣云。孟宗云、近來雪降霜下、椶青葉埋、谷係橋不見成行冬曉、竹林霜覆、可生^ニ時^ニ候云、又母之聞付、弥欣物哉云。其時孟宗泣々立出、礼天地、每竹林行ホリケレハ、或竹林雪間分見、頓笋七本生出。喜拔取之、忽采与母、無程病愈。此事聞世、帝王令成大臣云々(第三「一、悲母之事」)

陽明本孝子伝26孟仁の本文を示せば、次の通りである。

孟仁字恭武、江夏人也。事母至孝。母好食笋、仁

常勸採笋供之。冬月笋未抽、仁執竹而泣。精靈有感、笋為之生。乃足供母。可謂孝動神靈感斯瑞也

孟宗は、三国時代呉の人で、字を恭武、本名を宗といったが、呉の四世孫皓の字、元宗を避け、名を仁と改めたと言う(三国志呉書孫皓伝、裴松之注所引呉録)。金玉要集の孟宗譚は、文飾が極めて多く、説話として首尾の整ったものとなっている。そして、「其母受病」と記される点など、明らかに孝子伝の享受における展開を確認し得ることに注意すべく、また、例えば金玉要集の、

孟宗云、箬梅雨之比、山時鳥鳴時、卯花撫子開乱、下女殖小苗、折節コソ、紫笋分砂生候が、宝物集一の、

笋と云物は、四月の末、五月の始斗、卯花撫子咲て、山郭公啼わたる比こそみゆる物にてあれ(吉田本)

によるものであろうことを、かつて述べたことがある(また、「紫笋分砂生候」は、和漢朗詠集上、春、鶯の、「穿砂蘆笋」句へ元稹)を踏まえたものであろう。蘆笋は、蘆の芽)。さらに最近、金玉要集の、

東門五色之瓜、西京七斑之茄子

は、玉造小町子壮衰書、序123句の、

東門五色之瓜、西窓七斑之茄

によるものであること等、金玉要集孟宗譚の修辭に関する、優れた指摘が宇野瑞木氏によつてなされている。

(11) 韓伯瑜

金玉要集の韓伯瑜は、(12)蔡順へ続いている。その本文を示せば、次の通りである。

・伯瑜孝現世、弱杖泣音、聞朝天（第三「一、悲母之事」）

陽明本孝子伝4 韓伯瑜の本文を示せば、次の通りである。

韓伯瑜者宋都人也。少失父、与母共居。孝敬蒸蒸。若有少過、母常打之。和顔忍痛。又得杖、忽然悲泣。母怪問之曰、汝常得杖不啼。今日何故啼怨耶。瑜答曰、阿母常賜杖、其甚痛。今日得杖不痛。憂阿母年老力衰。是以悲泣耳。非敢奉怨也。故論語曰、父母之年、不可不知。一則以喜、一則以懼。讀曰、惟此伯瑜、事親不違、恭懃孝養、進致甘肥、母賜笞杖、感念力衰、悲之不痛、泣啼湿衣。前述宝物集一に、孟宗に続き、伯瑜、丁蘭、郭巨譚などの並ぶことを、参考とすべきである。

(12) 蔡順

韓伯瑜から続く、金玉要集の蔡順の本文を示せば、次の

通りである。

・蔡順訪後生、毎夕立廻悲母之墓。

露消跡小篠ニウツラネハ

野辺ヲ焼火モコ、口有ケリ

（第三「一、悲母之事」）

陽明本孝子伝11 蔡順の本文を示せば、次の通りである。

淮南人蔡順至孝也。養母甚々。母詣婚家、醉酒而吐。順恐中毒、伏地嘗之。啓母曰、非毒是冷耳。時遭年荒、採桑椹赤黑二籃。逢赤眉賊。々問曰、何故分別桑椹二種。順答曰、黑者飴母、赤者自供。賊還放之、賜完十斤。其母既沒、順常在墓辺。有一白虎、張口向順來。順則申臂探之、得一橫骨。虎去後、常得鹿羊報之。所謂孝感於天、禽獸依德也。

孝子伝における蔡順譚の成り立ちは、聊か複雑であつて、例えば右の陽明本は、蔡順の嘗吐譚（「母詣婚家……」）、分椹譚（「時遭年荒……」）、助虎譚（「其母既沒……」）の三つの話柄から構成されている（船橋本も同じ）。そして、金玉要集は一応、前の韓伯瑜、後の陳寔、顔烏等との関連などから考えて、その助虎譚冒頭、傍線部に基づくものと思われる（因みに、陽明本孝子伝の蔡順は、言泉集亡母帖、普通唱導集下末や、金沢文庫本孝子伝拔書等に引か

れる。内外因縁集所引は船橋本系)。問題は、その句に添えられた「露消」歌との関係である。

この歌は、孝行集36蔡順に見えている。孝行集の蔡順譚は、分樞譚、飛火譚、畏雷譚と歌から成っているが、今その飛火譚以下の本文を示せば、次の通りである。

蔡順カ孝事〔分樞譚、略〕サテ、彼カ母、臨終時節、隣家、俄火出、ハヤ吾カ家移トモ、可消様ナシ。然、順、母上イタキ付テ悲ケレハ、頓火消安穩ナリキ。

又、平生此母、雷電ヲソル、事、不常。此故、死後墓行、雷ナル時、走行、我此アリ。畏下ヘカラスト云。此事、大王迄及聞召、既過分車馬被下ケルトナム。

此心哥、

露消跡コサ、ニウツラネハ野辺ヲ焼火心有ケリ云々

右の飛火譚、畏雷譚は、陽明、船橋本両孝子伝に見えず、また、古孝子伝逸文にも見当たらないことに、まず注意すべきである(二十四孝系の孝行録11には、畏雷譚が載せられる)。飛火譚、畏雷譚の源流は、例えば後漢書三十九周磐列伝付伝の蔡順伝に見える(畏雷譚の源流はさらに魏、周斐の汝南先賢伝「説郛五十八所収」に溯る)。参考までに、その後漢書の本文を掲げておく。

母年九十、以寿終。未及得葬、里中災、火將逼其舍。順抱伏棺柩、号哭叫天。火遂越烧它室、順

独得免。太守韓崇召為東閭祭主。母平生畏雷。自亡後、每有雷震、順輒圓冢泣曰、順在此。崇聞之、每雷輒為差車馬到墓所。後太守鮑衆拳孝廉、順不能遠離墳墓、遂不就。年八十、終于家。

孝行集の蔡順譚により近いものとしては、例えば古注蒙求44「蔡順分樞」の注を上げることが出来る。古注蒙求の本文を示せば、次の通りである(真福寺本に拠る。声点を略し、句読点、返り点を施した)。

後漢蔡順字君平〔分樞譚、略〕乃母終、停棺堂上。東家失火、屋相連。順一身不能動、伏棺上而哭。

火飛過西家。母生時畏雷。每有雷、順即逸塚行云、順在此。太守聞之、給事車馬也。

因みに、蒙求の準古注系は、分樞譚と飛火譚のみで、畏雷譚を欠き、新注即ち、徐子光注は、飛火譚、畏雷譚に分樞譚(旧注を引く)を備えるが、前二譚の本文は、後漢書のそれに置き代えられている。さらに上記古注蒙求に酷似するものとしては、所謂敦煌本孝子伝即ち、事森(P二六二一。「出後漢書」と言う)や、類林逸文(類林雜説一・二所引)などを上げることが出来る。

これらのことから、孝行集の「露消」歌は、蔡順の飛火譚を詠んだものと考えて、まず間違いない。すると、金玉要集の蔡順譚は、助虎譚を内容とする句に、飛火譚を詠ん

だ歌が添えられていることになる。換言すれば、その句と歌とは、内容的に対応していないことが分かるだろう。問題は、それらが互いに照応することなく、言わば全く別の二話を並べただけの形となっていることである。つまりその句と歌とは、発する所がそれぞれ異なっている。このことは、金玉要集の蔡順譚の決して単純ではない成り立ちを物語るものと思われる。そして、それらの事実は、金玉要集蔡順譚の成立について、例えば孝行集の如き文献が先行していたであろうことを始め、正しく宝物集一に、

こまかには、孝子伝、蒙求などに申て侍るめりと記される所の幼学、注釈と呼ばれる文学史的環境の存在など、様々な課題を強く示唆しているのである。

四

(13) 陳寔

金玉要集の(13)陳寔は、次の(14)顔烏と対句をなしている。まず、その本文を示せば、次の通りである。

・山送如存時、陳寔榮耀之光、越王臣_ニ（第三「一、悲母之事」）

陽明本孝子伝15陳寔の本文を示せば、次の通りである。

陳寔至孝。養_ニ父母_一、其年八十。乃葬_ニ送之_一、海内奔赴、三千人、議郎蔡邕製_ニ碑文_一也。

右の陳寔譚の記述には、聊か問題があるが、今は立ち入らない。陳寔は、三国魏における九品官人法の創設者として知られる、陳群の祖父に当たる人物で、古孝子伝逸文中に、その徳望に優れたエピソードの残ることについて、近時触れたことがある。さて、その陳寔の話は、父母の葬送を廻るものなので、金玉要集「一、悲母之事」段における句としては、若干そぐわぬ氣もするが、少し前に、「爰以、報恩経云、供養衆僧、出世福田。孝養父母、三界福田_文」とも見えるから、それはそれで構わないのかもしれない。ともあれ、金玉要集の陳寔に関する本句は、孝子伝の享受史上、非常に珍しいもので、目下、金玉要集以外の例を見ないものとなっている。

(14) 顔烏

(14)顔烏が、先の(13)陳寔と対句をなすこと、前述の如くである。金玉要集の本文を示せば、次の通りである。

・墓所如存世、顔烏福貴色、勝_{タリ}等倫_ニ。
無跡アリシ主咲花ハ

雲井カサス桜成ケリ（第三「一、悲母之事」）

陽明本孝子伝30顔烏の本文を示せば、次の通りである。

顔烏者東陽人也。父死葬送、躬自負_レ土成墳、不_レ拘_ニ他力_一。精誠有_レ感、天乃使_ニ烏烏助_一、銜_レ土成墳。烏口

皆流血。遂取_レ県名烏傷_レ県。秦時立也。王莽篡_レ位、
改為_二烏孝_一県也

右の顔烏譚は、明らかに父の葬送を廻る話で（船橋本も同じ）、従つて、金玉要集「一、悲母之事」における句としては、やはりおかしいことになる。さて、顔烏譚は、まず孝行集10「顔烏孝事」に見え、その内容は、陽明本などにほぼ等しく、また、末尾には、

此意哥、

哀_レトゾ深山烏モコエタテシハカナサ歎_レク人子_ヲ為_ス

という歌が添えられている。しかし、この歌は、金玉要集の「無跡」歌とは一致しない。例によつて、金玉要集の「無跡」歌は目下、他に所見がないものとなつてゐる。

面白いのは、孝行集においてなお二十一話目に、「顔烏孝因縁事」と題される、もう一つの顔烏の話が引かれることであろう。孝行集21「顔烏孝因縁事」は、第十話と較べ、話術の骨格を同じくし、「哀_レトゾ」歌も載るなど、共通点が多い反面、

漢朝梁武帝御代、顔兒云者有

と言う書き出しに窺われるように、父の顔兒のことを詳述することなどを始め、極めて長大な物語となつてゐる点を、その特徴としてゐる。この言わば顔烏物語が中世、存外に流布したものらしく、例えば西晉聖聰の当麻曼陀羅疏卷二

十九「一、漢朝梁武帝御代顔貌之事」や（話末に、「已上、了誉草」とある）、大谷大学本扶説鈔卷二「四、顔烏孝行事」などに見えることを、かつて報告したことがある。そして、そのような顔烏譚の一連の流れ、即ち、

（孝子伝）

孝行集10「顔烏孝事」

←

顔烏物語（孝行集21「顔烏孝因縁事」など）

という顔烏譚の系譜は、唱導、注釈の場、また、幼学の場における因縁譚の形成を、実際に跡付ける例として、頗る興味深いものとしなければならぬ。

ところで、金玉要集の顔烏句に、

顔烏福貴色、勝等倫

と記し、また、その歌に、

無跡アリシ主咲花ハ雲井カサス桜成ケリ

と詠まれるような、言わば栄耀、福貴に該当する事柄は、「亦タ、其処ヲ義烏県名ル也」（孝行集）などとされること以外、孝行集10（また、陽明本孝子伝）には記載がないところが、孝行集21の方には、末尾近く、

于時大王……父ハ令_二大政大臣贈官_一。亦、顔烏、生年廿三而、昇_二右大臣_一。其故、弥實公位許サレ、成_二小国_一

王^トシニ

などとする記述があつて、金玉要集に記す所とよく一致するのである。このことはやはり、金玉要集における顔烏譚成立の背景に、先に触れた如きその流れのあつたことを、考えさせずにおかないものがある。

(15) 張敷

金玉要集には二箇所、張敷に言及する部分がある。それらを仮にa、bとして本文を示せば、次の通りである。

・ a 漢土長敷云者、一才^{ニシテ}別母^{ニシテ}、不覺^{ニシテ}置母形見^{ニシテ}、悲母形見^{ニシテ}置古扇見^{ニシテ}、泣悲侍^{ニシテ}云^{ニシテ} (第三「同悲母事」)

・ b 張敷泣形見扇^{ニシテ} (第三「同悲母事」)

a、bに対応する、陽明本孝子伝25張敷の本文を示せば、次の通りである。

張敷者、年一歳而母亡。至^ニ十歳^ニ、問^ニ覓母^ニ。家人云、已死。仍求^ニ覓母生時遺物^ニ。乃得^ニ一画扇^ニ。乃藏^ニ之玉匣^ニ、每憶^ニ母^ニ、開^ニ匣看^ニ之^ニ、便流涕悲慟^ニ、竟日不^レ已。終如^レ此也

張敷譚は、注好選上六十三、今昔物語集九・六などに喧伝し、古代以来よく知られた説話であつたらしいが、改めてここで注目しておきたいのは、孝行集9「張敷孝コト」及び、金沢文庫本「悲母事、一、張敷留扇事」の二点である。^⑧

特に後者は、所謂説草に外ならず、孝子伝に発する張敷譚が、言泉集亡母帖などを介し、岡見正雄氏の言われる「小さな説話本」の形で、実際に唱導の場へ供されていた事実を彷彿とさせる、極めて重要な資料となっている。一方、因縁譚として口頭詞章化した孝子伝諸話を対象に、孝行の名の下でそれらを類聚したものが、孝行集なのである。例えばそこへ、法華経注釈書の一、真福寺本法華経勸進抄の中に、近時見出された張敷譚などを加えるならば、幼学に発し、我が国の唱導、注釈活動に展開する張敷譚の諸相を、具体的に垣間見ることが可能となる。また、敦煌における張敷譚の盛行(敦煌本不知名類書甲、語対25・2「執扇」、羈金二・29・15「留扇」など)を考え併せるべきである。^⑨

(16) 東婦節女

最後に、金玉要集の東婦節女譚を取り上げる。その本文を示せば、次の通りである。

・ 市東婦^ッ節女、替夫命^ニ失命^ニ事、其例証也(第四「一、夫妻事」)

陽明本孝子伝43東婦節女の本文を示せば、次の通りである。

東婦節女者、長安大昌里人妻也。其夫有^レ仇。々人欲^レ殺^ニ其夫^ニ、聞^ニ節女孝令而有^ニ仁義^ニ。仇人執^ニ縛女人父^ニ、

謂レ女曰、汝能呼レ夫出者、吾即放汝父。若不_レ然者、吾当_レ殺_レ之。女歎曰、豈有_レ為_レ夫而令_レ殺_レ父哉。豈又示_レ仇人_二而殺_レ夫。乃謂_レ仇人曰、吾常共_レ夫、在_レ楼上_一寢。夫頭在_レ東。密以_レ方便、令_レ夫向西、女自在_レ東。仇人果来、斬將_レ女頭_二去。謂是女夫。明旦視_レ之、果是女頭。仇人大悲嘆、感_レ其孝烈。解_レ怨无_レ復來懷_レ殺_レ夫。其夫之心、論語曰、有_レ殺_レ身以成_レ仁、无_レ求_レ生以害_レ人。此之謂也。

まず東婦節女というのは、京師節女が正しい（列女伝五・十五。京師は、都の意）。京師の綴りの古体「京師」と、東婦の「東歸」とが似ることによる誤りとされている。金玉要集は、「次別離者、蘇規破合市東婦、節女……」とあって、「市」字が前の蘇規譚（この話は、注好選上七十五、今昔物語集十・十九の他、書陵部本系朗詠注、秋、八月十五夜「擣衣砧上」注などに見える）に付くのか、後の東婦節女譚に付くのか、判然としないが、暫く東婦節女譚に付けておく。さて、東婦節女譚は従来、平家物語における、文覚発心譚の原拠をなしたものとして知られるが、例えば孝行集15「東婦節女孝貞心事」に収められるそれが、延慶本平家物語二末「異朝東婦節女事」と深く関わることにについては、かつて述べたことがある。金玉要集の当条は、非常に短いものながら、孝行集15と共に、中世における東婦

節女譚流布の痕跡を示す資料として、極めて貴重なものとしなければならない。また、金玉要集における「別離」の「例証」として、蘇規譚と本話が番いになっていることに関しては、例えば今昔物語集の巻十において、季札譚を狭む第十九話と二十一話とに、やはり両話の並ぶことが参考となろう。

小稿を結ぶに当たり、二つの基礎資料を掲げておきたい。一つは、金玉要集の孝子伝関連記事の内に屢々見出だされる、和歌の一覧である。上記全十六条のその記事中、(2b)(5)(6)(9)(12)(14)には、それぞれ一首ずつの歌が含まれるので、金玉要集の孝子伝関連記事には現在、計六首の和歌が残されていることになる。これらの歌は、いずれ孝子伝和歌の一部と位置付けられるべき、興味深いものであるが、孝行集の場合に倣い、それらを纏めて、金玉要集の孝子伝関連記事における和歌一覧として示せば、以下の如くである（孝行集にも見える歌については、末尾の括弧内にその条数を注記した。なお大方の教示を乞いたい）。

金玉要集の孝子伝和歌一覧

(2b)〔舜〕

其心歌云、

ツ、井水ノ底_ニ沈ト見_ル月雲井ヲテラス光ナリケリ

(5)〔曹娥〕

モロトモニソコノミクツト沈シニ深キ思ノエニソアリケル

(6)〔叔先雄〕

オナシエニ身ヲソシツムルアヤメ草ヒキワカレニシアトロ

タツネテ（孝行集 37 曹娥）

(9)〔丁蘭〕

ウツシラクケフリノアトノ悲キニカサネテモユルチキリナ
リケリ

(12)〔蔡順〕

露消跡_ル小篠ニウツラネハ野辺ヲ焼火モコ、口有ケリ（孝行

集 36 蔡順）

(14)〔顔烏〕

無跡アリシ主咲花ハ雲井カサス桜成ケリ

もう一つは、両孝子伝と孝行集、金玉要集の対応一覧である。末尾に付した一覧表は、両孝子伝四十五条中における、孝行集、金玉要集それぞれの関連記事の対応状況を表わすもので、上欄両孝子伝の孝子名下に、孝行集と金玉要集の該当記事が、数字で配してある（孝行集の数字はその条数、金玉要集の数字は、小稿における通し番号を用いた）。この表を見て、直ちに気の付くことのひとつが、例え

ば孝行集と金玉要集に共通する条々の多さである。二書に共通の条々は十一に上るが、例えば金玉要集の場合、その数は全十六条中の十一條つまり、七割近くを占めることになる。このことは、前述、二書における二首の歌の一致が物語っている如く、単に偶然の結果とは思われず、両孝子伝に対する二書の孝子の選択に、一定の力が働いていることを示唆している。即ち、孝行集と金玉要集における、両孝子伝享受の一面が、実態として示されているのである。その実態解明に向けて、なお言泉集などの唱導資料を、本表へ加える必要のあることは、比較の見易いが、その作業は、改めて別の機会に俟ちたい。

孝子文学史は時代を縦断し、ジャンルを横断また、超越しているため、複雑多岐に亙るその実態を捉えることは、極めて難しい。中で、今野達、徳田進氏らによる先駆的、基礎的研究は、今日なおその輝きを失っていない^⑧。それを如何に継承し、発展させるか、例えば幼学として、唱導、注釈における実態の解明こそが当面、急務の一であるように思われる。小稿の目的は、その基礎的研究における一階梯をなすことにある。

付記 小稿は、平成18年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)による成果の一部である。

両孝子伝と孝行集、金玉要集

両孝子伝	孝行集	金玉要集
1 舜 2 董永 3 刑渠 4 韓伯瑜 5 郭巨 6 原谷 7 魏陽 8 三州義士 9 丁蘭 10 朱明 11 蔡順 12 王巨尉 13 老萊子 14 宗勝之 15 陳寔 16 陽威 17 曹娥 18 毛義 19 欧尚 20 仲由 21 劉敬宣	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿	(2a) (2b)

45 慈烏船 44 眉間尺 43 東婦節女 42 羊公 41 李善 40 禽堅 39 申明 38 申生 37 董黯 36 曾參 35 伯奇 34 蔣詡 33 閔子騫 32 魯義士 31 許孜 30 顏烏 29 叔先雄 28 姜詩 27 王祥 26 孟仁 25 張敷 24 高柴 23 朱百年 22 謝弘微	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿	(16) (7) (14) (6) (10) (15a) (15b)
---	--	--

注

- ① 幼学の会『孝子伝注解』（汲古書院、平成15年。重版、平成18年10月）
- ② 伊藤正義氏監修『磯馴帖』村雨篇（和泉書院、平成14年）
「説話唱導資料」所収
- ③ なお金玉要集について論じたものに、山崎淳氏「金玉要集、
覚書―その本文を中心に―」（『詞林』32、平成14年10月）、
同氏「金玉要集」と類話（『日本古典文学史の課題と方法』、
和泉書院、平成16年）、近本謙介氏「唱導の文の集成―内閣
文庫蔵『金玉要集』について―」（『伝承文学研究』53、平成
16年3月）などがある。また、表白類の孝子伝利用を論じた
先駆的研究に、高橋伸幸氏「宗教と説話―安居院流表白に関
して―」（『説話・伝承学』92、平成4年4月）があり、必見
のものとなっている。以下「一注記しないが、参照されたい。
孝子伝の本文は、注①前掲『孝子伝注解』に拠る。掲出を省
略した船橋本の本文については、同書を参照されたい。
④ 舜（重華）の話については、拙著『孝子伝の研究』（佛教大
学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成13年）Ⅲ二、また、近
著『孝子伝図の研究』（汲古書院、平成19年予定）Ⅱ二1を
参照されたい。
⑤ 昔話と孝子伝との関係については、注⑤前掲拙著『孝子伝図
の研究』序章参照。
⑥ 稲田浩二、小澤俊夫氏『日本昔話通観』26沖繩（同朋舎出版
昭和58年）むかし語り、七一「継子の井戸掘り 出世型」
関敬吾、野村純一、大島廣志氏『日本昔話大成』11資料篇
（角川書店、昭和55年）一昔話の型、本格昔話十継子譚二二
○A・B「継子と井戸」
⑦ 稲田浩二氏『日本昔話通観』28昔話タイプインデックス（同
朋舎出版、昭和58年）むかし語りⅧ継子話一八二「継子の井
戸掘り」注(1)
⑧ 魏陽については、注⑤前掲拙著『孝子伝図の研究』Ⅱ一4参
照。
⑨ 孝行集の本文は、『愛知県立大学文学部論集（国文学科編）』
39（平成3年3月）に翻刻を収めたので、参照されたい。ま
た、孝行集については、拙著『中世説話の文学史的環境
続』（和泉書院、平成7年）Ⅰ三参照。
⑩ 孝行集の和歌については、注⑩前掲拙著Ⅰ三2参照。
⑪ 叔先雄の名前については、注①前掲『孝子伝注解』29叔先雄
注一、二参照。十王本跡讀嘆修善鈔の本文は、湯谷祐三「金
勝山浄嚴房隆堯法印『十王本跡讀嘆修善鈔』の解題と翻刻」
（『同朋大学仏教文化研究所紀要』21、平成14年3月）に拠
る。
⑫ 伯奇については、注⑤前掲拙著『孝子伝図の研究』Ⅱ二2参
照。
⑬ 北堂書鈔体甲の呼称は、王三慶氏『敦煌類書』（麗文文化事
業股份有限公司、一九九三年）による。本文は、その31―01
―04（録文篇43、44頁）参照。図版は、羅振玉『鳴沙石室古
籍叢残』（民国6（一九一七）年）所収に拠る。
⑭ 日本霊異記と三州義士譚の関連については、矢作武氏「『日
本霊異記』と陽明文庫本『孝子伝』―朱明・帝舜・三州義士
―」（『相模国文』14、昭和62年3月）参照。
⑮ その一斑については、木村明子「今昔物語集、注好選と金沢
文庫本『楊威虎害害事』」「張敷留屋事」―孝子の文学史を考
える―」（『日本文学』54・2、平成17年2月）参照。
⑯

⑮ 近本氏注③前掲論文

⑯ 注⑤前掲拙著『孝子伝の研究』I三参照。

⑰ 注⑪前掲拙著III三二

⑱ 説話文学会平成18年度大会における、宇野瑞木氏による、『金玉要集』の孟宗説話をめぐる一考察」と題する口頭発表。

⑲ 注①前掲『孝子伝注解』11蔡順の「文献資料」及び、注一以下を参照されたい。

⑳ 両孝子伝の蔡順譚における助虎譚の成立については、注①前掲『孝子伝注解』11蔡順の注一〇参照。

㉑ 孝行集の蔡順が孝子伝出典話の並ぶ九話目に書き止され、第三十六話に移されていることについては、注⑪前掲拙著I三二参照。

㉒ 敦煌本孝子伝については、注⑤前掲拙著『孝子伝の研究』I一三参照。また、事森の蔡順譚は、王三慶氏注⑮前掲書、223—03—03（録文篇230、240頁）などに収められる。

㉓ 類林については、注⑤前掲拙著『孝子伝の研究』I二三及び、その注⑤参照。

㉔ 注①前掲『孝子伝注解』15陳寔、注一参照。

㉕ 拙稿「新出の古孝子伝逸文について」（『和漢比較文学』34、平成17年2月。注⑤前掲拙著『孝子伝図の研究』I一2に再録）

㉖ 注①前掲拙著I三三及び、その注⑥参照。

㉗ 孝行集21にも、「従、其而彼所ヲハ、義烏県トソ申ケル」とある。義烏県は、烏傷県（烏孝県）のことで（浙江省義烏県）、唐初に改名された（元和郡県図志二十六）。注①前掲『孝子伝注解』30顔烏、注一及び、五参照。

㉘ 木村明子「金沢文庫本『楊威免虎害事』・『張敷留扇事』」（『佛教大学大学院紀要』32、平成16年3月）に翻刻を収める。また、同注⑰前掲論文参照。

㉙ 近本氏注③前掲論文に指摘がある。法華經勸進抄は、『法華經古注釈集』（真福寺善本叢刊2、臨川書店、平成12年）に影印、翻刻を収める。

㉚ それらの本文については、王三慶氏注⑮前掲書の231—03—04（録文篇264頁）、311—25—02（同381頁）、312—29—15（同421頁）を参照されたい。

㉛ 西野貞治氏「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」（『人文研究』7・6、昭和31年7月）四、註②

㉜ 注①前掲拙著I三二

㉝ 注①前掲拙著I三二

㉞ 今野達氏「陽明文庫蔵孝子伝と日本説話文学の交渉 附今昔物語出典攷」（『国語国文』22・5、昭和28年5月）、「注好選集について—附私聚百因縁集成立考—」（『国語』2・2、3、4合併、昭和28年9月）、「古代・中世文学の形成に参与した古孝子伝二種について—今昔物語集以下諸書所収の中国孝養説話典拠考—」（『国語国文』27・7、昭和33年7月）、徳田進氏「孝子説話集の研究—二十四孝を中心に—」（井上書房、昭和38年。再刊、説話文学研究叢書4ヘクレス出版、平成16年）